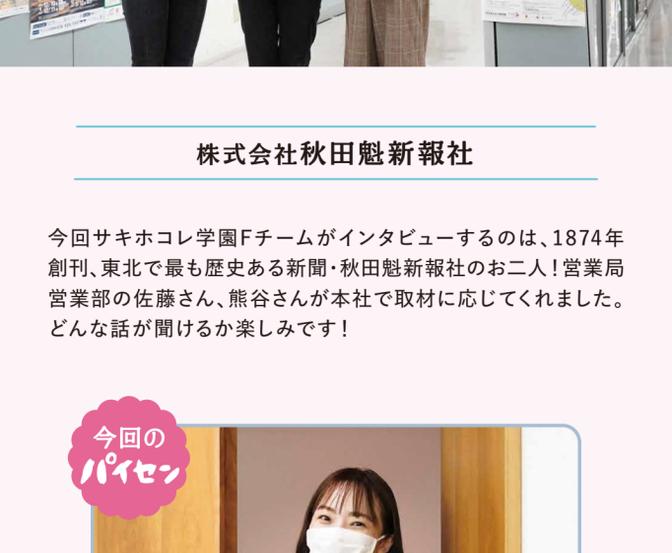


教えて

パイセン!

サキホコレ学園による 秋田暮らしインタビュー

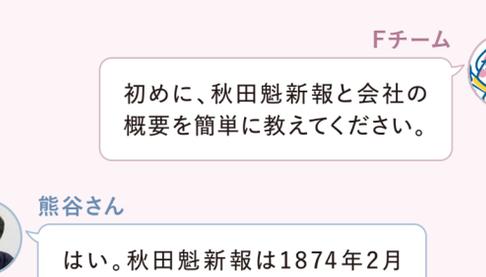
仕事もプライベートも充実した秋田ライフを送りたい。学園のメンバーが人生の『パイセン』に、仕事のこと、プライベートのこと、何でも聞いてみました!



株式会社秋田魁新報社

今回サキホコレ学園Fチームがインタビューするのは、1874年創刊、東北で最も歴史ある新聞・秋田魁新報社のお二人!営業局営業部の佐藤さん、熊谷さんが本社で取材に応じてくれました。どんな話が聞けるか楽しみです!

今回のパイセン



佐藤さん

Fチーム

本日はよろしくお願いします。



佐藤さん・熊谷さん

よろしくお願いいたします。

Fチーム

初めに、秋田魁新報と会社の概要を簡単に教えてください。



熊谷さん

はい。秋田魁新報は1874年2月2日に「遐邇(かじ)新聞」という名でスタートし、何度か改題して1889年2月15日に秋田魁新報となりました。国内で4番目に古い、創刊148年の歴史と伝統があります。発行部数は約20万部で、会社の従業員数は260名ほど。社内の部署は私たちが所属する営業局に加えて、編集、販売、総務などの局に分かれています。



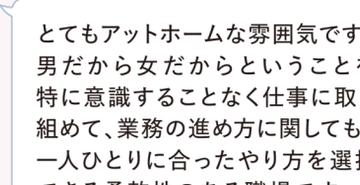
Fチーム

新聞会社は男性社員が多いイメージがありますが、女性社員の割合はどのくらいですか?



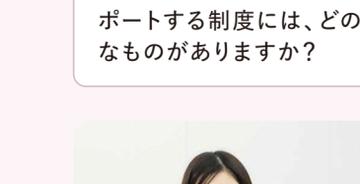
佐藤さん

おっしゃる通り男性の方が多い職場ではありますが、最近は女性の採用も増えていて、私が所属する営業局では約4割が女性です。年を追うごとに、男女比が5:5に近づいてきている印象がありますね。



熊谷さん

2022年3月には女性の取締役も誕生したんですよ。



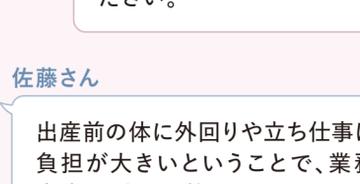
Fチーム

世の中に情報を提供する新聞社が、率先して女性の活躍の場を広げているのはとてもいいことですね!職場の雰囲気はどのような感じですか?



佐藤さん

とてもアットホームな雰囲気です。男だから女だからということを特に意識することなく仕事に取り組めて、業務の進め方に関しても、一人ひとりに合ったやり方を選択できる柔軟性のある職場です。



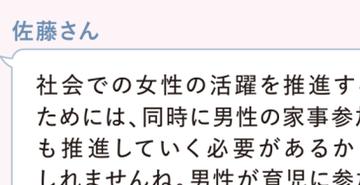
Fチーム

すてきな環境ですね!社員のワークライフバランスをサポートする制度には、どのようなものがありますか?



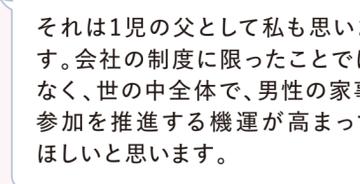
熊谷さん

週休2日、年間休日111日、年次有給休暇は最高20日で繰り越しもできます。そのほかにリフレッシュ休暇、慶弔休暇、男女とも1年間取得することができる育児休暇などがあります。



佐藤さん

私も出産の際に育児休暇を取得したのですが、休暇前後のサポートも手厚く助かっています。



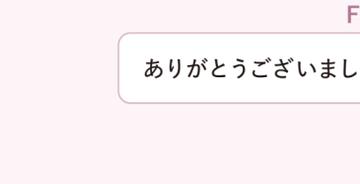
Fチーム

そうなんですね。どのようなサポートか、詳しく聞かせてください。



佐藤さん

出産前の体に外回りや立ち仕事は負担が大きいということで、業務内容などを調整してくれました。出産から2年たった今も、家庭との両立ができるように配慮してもらっています。まだまだ子どもに手がかかる時期なので、本当にありがたいです。



Fチーム

育児休暇前からの気遣いや、復帰後の配慮があるのはとても心強いですね。御社のように女性へのサポートが充実した会社が増える一方で、社会全体ではまだまだ女性活躍が進んでいない現状もあります。進まない原因は、どのようなところにあると考えますか?



佐藤さん

社会での女性の活躍を推進するためには、同時に男性の家事参加も推進していく必要があるかもしれませんね。男性が育児に参加しやすい環境がもっと整うと、働きながら子どもを育てる女性はだいぶ楽になると思います。たとえば一般的に子どものオムツ交換台があるのは女性トイレだけで、男性トイレには設置されていないといったこともあります。

熊谷さん

それは1児の父として私も思います。会社の制度に限ったことではなく、世の中全体で、男性の家事参加を推進する機運が高まってほしいと思います。

Fチーム

たしかに社会で女性がもっと活躍するためには、男性の家事参加が必要ですね。では最後に、先輩から私たちの世代に向けたメッセージをお願いします。

佐藤さん

仕事をする上で日々やりがいを感じられること、毎日楽しいと思えることはとても大切なことです。性別に関係なく自分の働きたいように働ける、そのための選択肢がたくさんある会社をぜひ選んでください。

Fチーム

ありがとうございました!

女性の活躍推進と聞くと、女性が働きやすい環境の整備は進んでいるのか?といったところばかりに目が行きがちですが、男性への配慮や人々の意識改革も同じくらい重要だということに、今回の取材で気づくことができました。女性が性別を意識することなく仕事に打ち込めて、男性も当たり前家事や育児に関われる世の中が早く実現してほしいです。